コロナ禍における国際医療協力、今、我々にできること。フィリピンへのWHO GOARN派遣を通じて

国立国際医療研究センター 国際医療協力局
運営企画部保健医療開発課 / 医師 法月　正太郎

2020年は、新型コロナウイルス・COVID-19で幕を開けました。瞬く間に世界中で広がり、近年経験したことのないパンデミックが現在も進行中です。国をまたぐ移動が制限される中、今、我々はどのような国際医療協力ができるのでしょうか。

今回、私は2020年２月末から２か月にわたり、世界保健機関（WHO）のGOARN（Global Outbreak Alert and Response Network）を通じたフィリピンの新型コロナウイルスに関する感染対策の支援を行う機会を得ました。今回の経験を通じてコロナ禍における、ニューノーマルな国際医療協力について考えてみたいと思います。

GOARNとは、WHOによって設立された250を超える地球規模の技術パートナーで、世界的に重要な公衆衛生危機に対し、迅速に事態を覚知し、確認し、対応するネットワークです。感染症などの公衆衛生危機が発生した時には、遅滞なく専門家を派遣することができるスキームになっています。20年の歴史があり、WHOの健康危機対応における需要な役割を担ってきました。

国立国際医療センター（NCGM）はGOARNの技術パートナーとなっており、2019年にはWHOの協力を得て、GOARN研修（GOARN Tier 1.5 Training Workshop）を日本で開催しました。今回、2020年１月中旬にGOARNパートナー機関に対し、WHO西太平洋地域におけるアウトブレイク対応の募集があり、NCGMとして協力すべきであるとの判断で、私が応募させていただくことになりました。WHOでの選考プロセスを経て、GOARN事務局が私の採用を決定し、2020年２月中旬に派遣されることが決定されました。

私は、約２か月間、WHOフィリピン国事務所に派遣され、感染管理・対策の専門家として主にフィリピン保健省と共にフィリピンの感染症対策を強化するように命ぜられました。着任直後のフィリピンでは、中国からの輸入例３例だけでしたが、着任１週間後には初めて国内例が報告され、検査体制が強化されると共に、急激に報告症例が増加していきました。そのため、フィリピン政府は、３月15日よりマニラ首都圏などのロックダウン（都市封鎖）を開始しました。日本の緊急事態宣言とは異なり、マニラ首都圏における公共交通機関はタクシー・電車・バス等の運航停止、マニラ発着のフィリピン国内線も全便欠航、スーパーや銀行、病院、ドラックストアなど社会維持のために最低限必要な一部の業種を除きレストランやジム、ショッピングモールも閉店となりました。酒類の販売も停止され、20時から５時までは外出禁止となったことから、ロックダウン前では考えられない渋滞もない静かなマニラになりました（写真１）。

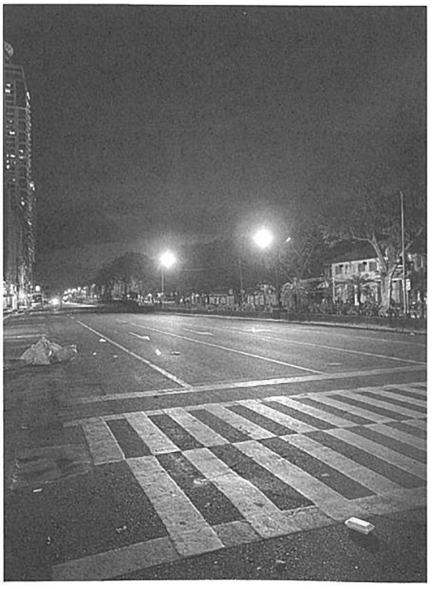

写真１

ロックダウンの直前に、ダバオ市およびマニラ首都圏における５つのコロナ拠点病院を実際に見学し、感染管理の実務者とともに現状について議論し、改善点などを意見交換することができました（写真２）。その上で対面での研修が困難になったことから、保健省と共に感染対策についてのオンラインでの研修を計画し、UNICEFやUSAIDと共に研修プラットフォームを立ち上げ、４月６日から５月25日までの間に9,000人以上の医療従事者が受講することができました（写真３）。対面での講義と違い、参加者の反応が見えにくく、双方的なコミュニケーションがとりにくいといった難しさがありました。このため、毎回、ライブでの講義を行い、チャットボックスによる質問の受付、プレテスト・ポストテストの実施など、できるだけ効果が上がるような研修を行いました。私自身もこのようなオンライン研修の立ち上げは初めての経験であり、WHOの職員、保健省の職員や他のパートナー機関と協力してより良いものを作り上げていきました。

今、世界では近年経験したことのない感染症パンデミックが起きており、様々に発生する問題に対して柔軟に対応し、迅速に解決する能力が求められています。米国のWHO脱退宣言や中国の覇権争いなど、国際的な秩序は大きく変わりつつあり、これまでの国際保健の枠組みも大きく変化しています。新型コロナだけが致死的な病気ではなく、HIV・結核・マラリアという三大感染症や非感染性疾患など疾病負荷の高い病気はたくさんあります。このような中で、いかに持続可能で、世界の人々がより健康になる世界を目指していくかが、今まさに求められています。私は、たとえ世界に行けずとも実施可能な国際医療協力は必ずあると信じています。柔軟な発想でニューノーマルな国際医療協力を行っていく時代がやってきたのだと感じています。

写真２

写真３